

家族ががんに罹患することによる「家族のあり様の変化」について

西 野 薫

問題・目的

本研究の目的は、家族ががんに罹患することによる家族の関係性の変化に着目し、がん患者と患者家族に焦点をあて、その変化のプロセスを導きだし、変化が家族間に与える相互作用を検討することである。

研究の背景として、がんという病が、死を意識させる病であり、がん患者はがんに伴う手術や化学療法、放射線治療などの過酷さを伴う治療や、疼痛、身体像の変化といった身体的な苦痛のほか、再発や転移の不安、将来の不安など、心理的・社会的な危機が重複する体験であることがあげられる。

方 法

調査方法は、がん患者の主体的体験に焦点を当て、当事者の視点でとらえる質的研究にて行った。面接による半構造化インタビューを用いて調査を行い、複線径路・等至性アプローチ(TEM)にて分析をおこなった。TEMは、当事者と家族の関係をシステムとして捉え、何が起きているのかといった変容に具体的に焦点を当て、変容のポイントになる動的なメカニズムを把握することが出来ると考えられている。研究の協力者は、地域のがん患者会に参加している70代のがん罹患体験者の女性2名であり、個々人の経験の様相を明らかにするため各々で分析した。

結果・考察

その結果、Aさんは【家族のあり様が再構築される】という等至点に至るまでのプロセスにおいて、「夫の譲らない態度」が促進要因として働き【夫婦の力関係の転換が見られる時期】という分岐点を経て、「がんから続く病の大変さを思い知る」「凝ってやっていたことを“卒業”する」ことにより【囚われていたことから解放される】という分岐点が見いだされた。Bさんは【家族のバランスが保持される】という等至点に至るまでのプロセスにおいて、【夫の変わらない態度】が促進要因として働き「自分の辛さを、敢えて言わない」ことにより「夫婦の役割分担が保持される」を経て【家族それぞれが自分の生活をいそしむ】という分岐点が見いだされた。本研究の結果から、家族ががんに罹患することによる家族の関係性の変化は、疾患による衝撃や苦痛を感じながらも、家族や仲間、医療従事者などの他者に支えられながら、相互作用が働いているといったプロセスが明らかになった。さらに、家族の成長や発達と家族の時間的变化によって、家族のホメオスタシスが崩れ、新たなシステムが再生され、変化が導かれることもある。一方、ネガティブ・フィードバックが働き、安定をはかり、逸脱を最小限に留めることもあることが示唆された。